
それは素敵な休暇の過ごし方 ~ 2日目：午前 ~

阿佐木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは素敵な休暇の過ごし方 2日目：午前

【Nコード】

N2640BA

【作者名】

阿佐木 零

【あらすじ】

pixivにて投稿していた二次創作です。二日目の始まり。見知らぬ家のお世話になった初日の朝。やはり少なからず緊張した映画は油断して寝ぼけてしまう。

前日までのあらずじ。

長期休暇の初日に家が半壊した。

小鳥たちの声に囁かれるようにして目が覚めた。

「んっ」

うつすらと開けた目には、見慣れない天井と「今何時なんだろう？」という疑問が同時に浮かぶ。

うつん、ちよっと待って私……うつん、そういえば休みだった。

昨日は疲れたし、今日はもうちよっと寝ていよう。

うん、それがいい。

目を閉じて丸まってみると、木漏れ日がそっと降り注いで気持ちがいい。

再び微睡んでいく意識の中、

「おやひゆみなしゅい」

誰にともなく言った言葉は

「ふふ、おやすみなさい」

聞き捨てならない声によって私の意識を覚醒させた。

ガバツ、と勢いよく起きてみれば、扇子を口元で開き、必死にニヤニヤと笑っている口元を隠している紫がそこにいた。

見えてるから。隠してるつもりだろうけど、ばっちり見えてるから口元。

「あら、寝ないの?」

「ね、寝るわけがっ」

直前まで私は何を言っていた?

寝ぼけている頭で、

呂律の回っていない下で、
そう

「おやひゆみなしゃゝい。……ふっ」

「ゆ、ゆゆゆ紫イイイイイイイッ!」

平和な朝は私の叫びで消え去った。

自分の家じゃない家というのは、新鮮だがどこか恐ろしいものだ。間取りはひと通り教えてもらってはいたものの、本当に進んでい

る方向でいいの不安になる。

「まったく、朝からとんだ目に……」

あの後、紫を速攻で叩き出し、そのまま布団も片付けた。
寝ぼけ眼でもさすがに目が覚める。

「あ、おはようございまーす!」

縁側を歩いていたら、外の庭から声をかけられた。

元気はつらつと言った様子の声の主は八雲橙。紫の式神の式神だ。

「ええ、おはよう」

こちらに向かって大きく手を降っている橙に小さく手を降って答えると、彼女は満足したようでそのまま森へと走っていった。

昨日も楽しげに話していたから、きつと今日もまた妖精たちと遊ぶのだろう。

「おはようございます、四季様。家どころか森の中にまで聞こえていましたよ?」

苦笑しながら顔を見せたのは八雲藍。紫の式神である。

「おはよう。朝から紫にしてやられたわ……」

まさかそんなに大声だったなんて。

赤くなる顔を逸らしていると、藍はますますおかしいようで少し吹き出した。

「失礼。いえ、騒がしい朝も久しぶりなもので」

「迷惑じゃない？ 急に押しかけちゃったわけだし」

「とんでもない。むしろ家事をやってくれる方が増えた嬉しいくらいですよ」

そうして私と藍は並んで歩き出す。

「家主はどうなの？」

「それが……」

藍は何とも言い辛そうに口ごもる。
なるほど、大方わかった。

「納得。貴方も大変ね」

「いえ、それが務めですから」

どこかのサボリ癖のある死神にも聞かせてやりたいと思った。

麩を開けると、諸悪の根源はだらけきっていた。

机に顎を乗せて、これでもかという程のだらしなさをアピールしつつ、

「藍、ご飯まだー？」

親鳥を待つ雛のように口をパクパクさせていた。ワサビでも詰め込んでやるのかな。

「はいはい、ちょっと待っててくださいね」

「返事は一度。最近たるんでるわよ、藍」

「貴方もね」

チヨップ。

「いたっ」

呻く紫の隣に腰を下ろす。

「それにしても昨日からずっと不思議だったんだけど、何で机に椅子なの？」

紫の家は純和風だ。

森の魔法使い達のように椅子や机があるわけではなく、土間があり畳がある、そんな家だ。

そこに、あるうことか机と椅子がこれでもかと存在感を出して鎮座している。

正直、気になるとかいう度合いを超えて最初は気が付かなかった。

「こつちの方がだらけてる感じがするじゃない？ ほら、畳だと寝転がってるから不衛生だし」

「どっちも不衛生なのにまず気付きなさい。大体貴方は」

「あーあー、聞ーこーえーなーいー」

せっかく私が説法しようというのに、紫は耳を塞いで聞く気がないし、藍に至っては笑っているし。

ああ、本当に

騒がしい朝ね。

《午後へと続く》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2640ba/>

それは素敵な休暇の過ごし方 ~ 2日目：午前～

2012年1月6日19時46分発行